

イラン探訪記 バラを訪ねて

岐阜県立国際園芸アカデミー

上 田 善 弘

なぜイランか？

イランに行ってみたくと思ったのは、20年以上前からである。

バラの研究を始めて30年、大学院時代の恩師故中尾佐助先生（大阪府立大学名誉教授、照葉樹林文化の提唱者）の影響を受けたためか、興味を中心は栽培バラのルーツを探ることにあった。

そのきっかけは、ブルガリアの香料バラ研究者による総説に掲載されていた1枚の図であった。その図には香料用バラの栽培が始まったのはイランの南、シラーズに近いところで、そこから中東、北アフリカ、ヨーロッパに伝わったことが描かれていた。この総説は多くの文献をもとに書かれたもので、信頼性は高いと思われる。現在のバラ栽培の主たる目的は観賞用であるが、原点は香料用である。つまり、世界で始めてバラが産業用に栽培されたのは、イラン（古代ペルシャ）ということになる。そのようなイランにいつの日か訪れてみたいと思っていたが、さすがに何らかのつてがなけ

れば訪ねられない国である。

特に、近年の周辺国（イラクとアフガニスタン）の状況やイランでの核開発問題に始まる国際関係などから、訪問は難しいと考えていた。ところがその機会が昨年開催されたバラの国際シンポジウムでめぐってきた。岐阜で開催した第5回国際バラシンポジウムにイランから数名の参加者があった。しかも、訪れてみたいと思っていた、シラーズからも参加者があった。シラーズ大学教授でバラの研究者コシュ・クヒ教授で、こちらのイラン訪問希望を伝えると、大歓迎とのことであった。それではと、まだ繋がりにあたにかいうちに思い切って訪問に踏み切ったのである。出発は平成22年4月29日、帰国は5月11日、連休をいっぱい利用して訪問した。

いざイランへ

イランへは、中部国際空港からアブダビとドーハ（カタールの首都）を經由し、テヘランに入った。イマームホメイニ空港ではお願いしていた中東協力センター兼JETRO（日本貿易振興機構）のテヘラン駐在所長の山本洋一氏に迎えに来ていただいた。到着の翌日、最初の目的地、マシャド（テヘランの東、約1,000km）への国内便までに時間があるので、山本氏に絨毯博物館と考古学博物館をご案内いただいた。考古学博物館では、入場とともにその展示はネアンデルタール人で始まる。有名なシャニダールの洞窟は隣のイラク北部にあり、それに近いイラン北西部には多くの同様な洞窟があり、そのような古い時代までイランは遡るということである。石器から始まり、数多くの土器、ペルセポリスの遺跡の一部まで、見ごたえのある博物館であった。博物館内にイランの歴史についての詳細な年表の展示があり、日本より2000～3000年は遡れる比べようのない歴史の古さにふれることができた。



写真1 ナシル・アル・モルク・モスク（シラーズ市内）精巧な建物壁面のタイル模様とイスラムの典型的な中庭。タイルにバラの絵を多用していることから、ローズモスクとも呼ばれる

マシャドにて聖地の視察と野生植物調査

テヘランから夕方の便でマシャドに向かった。マシャドではお願いしていたマシャド大学のキアニ女史に迎えていただいた。彼女は、昨年の岐阜でのバラシンポジウムに参加していたバラの研究者の一人で、今回の渡航にあたっては随分お世話になり、今回の国内便航空券の予約と購入はすべて彼女にお願いした。じつは、日本の旅行社からはイラン国内便航空券の購入が難しく、しかも就航便の時刻等もなかなか把握できないことによる。

マシャドに到着翌日、大学院の学生を対象とした植物調査に同行させていただいた。マシャド大農学部園芸学分野の大学院の学生を対象とした野外植物調査で、植物科学研究センターから植物分類の専門家、ジョハーチ先生が現地での案内と指導を担当された。私にとっても現地の植物に詳しい研究者が同行されたことは幸いであった。植物に関する万国共通の言葉、学名でお互い話ができるためである。翌朝、6時出発とのこと。植物調査地がマシャドから西に約300kmも離れているためである。調査地はダルカッシュという地で、持参したGPSで測定したところ、北緯37度26分、東経56度46分、アルボルス山脈（テヘランとカスピ海の間にある山脈）の東に連なる山系のなかである。今回のイラン訪問での唯一の野生地調査で期待がふくらんだ。

本道からそれ、山岳のなかに入っていくと、周辺には珍しい自生植物を見ることができるようになった。すぐにバラの野生種があることを教えられ、車を停め、調査した。まず、どこにでも自生しているロサ・カナナ (*Rosa canina*) とともに黄色い花の野生種を発見した。ジョハーチ先生によると、ロサ・ヘミスフェリカ (*R. hemisphaerica*) とのこと、まさか今回の調査で見られるとは思っていなかった野生種である。本種の栽培



写真2 イランの野生バラの一種、ロサ・ベルシカ

型、八重咲きのは見ていたので、一重の野生型を見ることができたのは幸運であった。その後、学生やその他の先生とも合流し、山を散策することになった。植物を手に取りながら、ジョハーチ先生の説明が行われていった。ちょうど、チュურიッパ属、エレムス属、イリス属などの球根植物の開花時期で、山中いたるところで見ることができた。

この植物調査での大きな収穫はロサ・ベルシカ (*Rosa persica*) との出会いである。学名にあるように、もともとの原生はまさにイランである。本野生種はイランを中心に中央アジアを経て、カザフ共和国、中国新疆ウイグル自治区にまで分布する乾燥地のバラである。本種には一般的なバラ属の野生種にない特徴があり、葉が単葉となり、花卉の芯の部分に赤色が入り、花に目（ブロッチ）があるように見える。この野生バラが道路沿いの斜面に群生していた。私自身、この野生種の調査を中国新疆では何度か調査していたのであるが、そこでは山岳部ではなく都市部周辺や農地の周辺など平坦地でしか見たことがなかった。今回のイランでのような山岳部に自生しているのは初めてであった。

マシャド市はイスラム教の聖地であり、ハラメ・モタッハル広場（ハラム）を案内していただいた。この地がイスラム教の聖地の一つとなったのは、817年に8代目エマーム・レザー（エマームとはシーア派の最高指導者のことをいう）がこの地で殉教（信仰する宗教のためその生命を犠牲にすること）したことによる。シーア派の聖地としてマシャドは国内や周辺国から一年を通して数多くの信者が訪れることで有名な所でもある。広場の周辺にはこれらの訪問者のための多くのホテルがあるとのことであった。この広場に入るには、厳しいセキュリティチェックがあり、写真撮影も一切許されていなかった。また、女性はすべてチャドルという黒い布で頭から足首まで覆わなければならない。敷地内は広大なお祈りの場所であり、建物もイスラム建築の粋を尽くしたすばらしいものであった。

ところで、イランの国花はバラである。マシャド滞在中、道路の分離帯、公園、観光地など、市内のいたるところでバラの植栽を見ることができた。

香料バラ栽培の起源地、シラズへ

さて、今回のイラン訪問の最大の目的地、シラズへは、マシャドから飛行機で約1時間40分。シラズ空港では昨年のバラシンポジウムにも参加されたシラズ大学コシュ・クヒ教授に迎えていただいた。シラズ滞在中は、教授が不在となられることが多く、

現地を案内してくれる大学院生、キャラミ君もいっしょに迎えてくれた。

シラーズはテヘランの南、約 600km、ペルシャ湾に沿ったザグロス山脈中、標高 1,600m のところに位置する。エジプトまでも支配した広大な王朝、アケメネス朝はこの地方から起こった。翌日、シラーズ地域の古い香料バラの産地、メイマンを訪ねた。メイマンはシラーズの南、約 100km のところにある。この地方はブドウの有名な産地であり、ブドウ畑を眺めながら乾燥した大地を抜け目的地に到着した。

現地では、ハーブティーで迎えられ、しばらく歓談の後、水蒸気蒸留法によるローズオイルとローズウォーターの生産現場を見せていただいた。一釜に 40kg のバラの花と 80 リットルの水を入れ、加熱し蒸留するという。品質のよいものは 1kg の花に対し、1 リットルのローズウォーターが得られるようにすることだという。道路に面したところには直営のローズウォーター専門店があり、こんなにも需要があるのだろうかというほどのボトルが陳列されていた。

この後、この地域で最も古いローズウォーターの生産者のところとバラ園場が隣接する生産会社を訪問した。今年の春は例年になく高温で推移したため、ダマスクローズの花の最盛期は過ぎているとのことであったが、園場では残り少なくなった花の収穫が行われていた。現在は一人の労働者が一日で約 20kg の花を摘むという。最盛期には一日に 70kg も摘むそうである。その最盛期には 1 ha に 20 人の労働者が花摘みをするという。ちなみに、花摘みの時間は早朝 5 時から午前 10



写真3 ローズウォーターの専門店

時までで、精油の発散量の多い時間帯に行われる。現地で聞いたところ、この辺りでのローズウォーターの生産は 2000 年前からという。文献では紀元前 1000 年以上前から生産されていたということなので、シラーズ地域では紀元前から香料バラの生産が始まっていたのは間違いのないであろう。

その翌日は、ピスタチオバターを生産工場と新しくローズウォーターの生産ラインを稼働している会社を訪問した。ピスタチオはもともとイランから中央アジア原産の植物であり、イランは世界一の生産国でもある。今回訪問した会社は、新たなピスタチオの加工品として、ピスタチオバターを生産していた。生のピス



写真4 ダマスクローズの生産園場、花摘み作業中

タチオを圧縮し、搾り出された汁液からバターを作る。そのままのものやフレバーをつけたものを試食させていただいた。そのままの方がピスタチオ独特の香りと味がして日本人にも好まれると思った。

その後、新しいローズウォーターの生産会社を訪問した。まだ、工場を開設してから4年目ということであったが、バラだけでなく、フェンネル、ミント、カモミールなどのハーブを主に、全部で20種類もの植物の蒸留ウォーターを生産しているという。製品のパンフレットをいただいたが、それぞれの製品について身体への効用が書かれていた。ちなみに、この工場で行われるダマスクローズはシラーズから約300km東のダラブの標高の高いところで生産されているという。ダラブはシラーズを含むファールズ州の最大のダマスクローズの産地であり、4,000haもの生産面積があるとのことであった。

また、イランではローズウォーターはダマスクローズだけでなくムスクローズ（ロサ・モスカータ）からも生産されるとのこと。実際、いたるところでムスクローズを見ることができ、街路樹にまで利用されていた。

ファールズ州だけでも4,500haものダマスクローズの生産面積があり、イラン国内には他にもカシャーンのような大きな産地もあり、相当な量のローズウォーターの生産量があると思われる。それらがどのように使われるのか、どのくらい輸出されているのかうかがってみたが、多くは国内で消費されるとのこと。如何にローズウォーターがイラン人の生活と密接に関わっているかを知ることができた。それらは飲用を中心に、化粧品や食品のフレバーにと利用されるようである。また、ローズウォーターはイスラム教のお祈りとも深い関係があり、お祈りの際にもローズウォーターが撒かれるのであろう。

イランの食事

イランの主食は米とナンと呼ばれるパンである。国全体が乾燥したイランであるが、テヘランの北のアルボルス山脈の北は結構、降雨があり、カスピ海沿岸の水田地帯では稲作が行われている。そんなことから、私にとってはありがたく、いつでも米を食べることができた。もっとも日本の米とは異なり、長粒で、インデイカ米より長い米粒であった。この米をピラフのようにし、サフラン（イランはサフランの世界一の生産国でもある）で黄色く色をつけたものをよく食べた。ナンにもいろんな種類があり、焼き方の違いにより厚かつ



写真5 博物館の庭園におけるバラの植栽（シラーズ市内）

たり薄かったりする。これらの米やナンに、キャバーブと呼ぶ、羊、牛、鳥の焼き肉と、それに野菜を付け合わせて食べるが多かった。もちろんこれ以外にも煮込み料理や魚料理など様々であった。イランでは、当然、アルコールは御法度であるが、その代わりノンアルコールビールがどこにでも置いてあり、私は専らノンアルコールビールを飲用していた。

以上、出発前から滞在中までいろんな方にお世話になり、無事、目的を果たすことができた。なかなかビザの取得、イラン国内便の予約もままならないなか、直前まで本当に行けるのだろうかと不安であった。だが、旅行社の担当の方、イランでの受け入れ先の方々のお陰で、万全な状態で出発でき、イランでも予定どおり何のトラブルもなく調査、視察できた。訪問前からイランは危険な国であるような印象をもっていたが、全くの杞憂にすぎなかった。人々は親切で寛容であり、ホスピタリティの豊かな国民であった。政治体制による様々な規制があるものの、思っていた以上に人々の顔に明るさがあるように思われた。文化遺産が多く残された歴史のあるすばらしい国であった。より多くの人にイランに出かけていただき、交流をもってほしいと願っている。